

井上さんに学んだ旧時代 あるいは「無分別ざかり」

諸橋泰樹 MOROHASHI Taiki

- 1 —— 夢の気の分岐点
- 2 —— 時をかける和光
- 3 —— あるいは酒でいっぱいの子
- 4 —— 人文学部質の教授
- 5 —— 和光大含め全部沈没

1 —— 夢の気の分岐点

1979年4月。23歳を間近にしたぼくは、庄司薫の主人公を気取って大学に行くことを拒否してきたこの数年間の方針を変更して、和光大学人文学部人間関係学科に入学し、井上輝子助教授のプロゼミに加わっていた。高校を出て19歳からのその数年間、人間とは何か社会とは何か、どうすれば争いのない世界が構築できるのか、自分で知識を得てそれを鍛えてきたつもりだったが、父に捨てられたひとり息子が、母子家庭で高等遊民のような生活ができるわけがない。実際には、同世代たちがキャンパスライフを謳歌しレジャーに出かけ、就職してゆく間の4年間、休みなしのアルバイトに追われる「出口なし」の日々だった。

マスコミの現場で表現をして社会を変えてゆくか、小説家ないしルポライターのような作家となってメッセージを発するか、小田実のような市民運動家として活動するか、それとも社会科学系の学者となってアカデミックに社会変革をしてゆくか、いまだ何ものでもない自分の“白日夢”も、そろそろいい加減にしないとイケない。「大学」という場で体系的に知を鍛えていくことを、もう自分に許してもいいのではないか……。

大学にはその頃まだ、あるいは和光大学にはその頃まだ、大学や学問のあるべき姿を高校生や浪人生、さらには他大生や社会人に考えさせる、そのような魅力・魔力があったのだ。今や初老の領域にあるかつての井上ゼミ生が過ごした、「旧制大学」のごときひとコマを紹介することで、井上さんがこのような時代に和光大学とともにあったのだということ、記憶してもらえるかもしれない。

2——時をかける和光

プロゼミ時代の思い出をいくつか書き残しておきたい。

入学時の79年度井上プロゼミは、政府の女男平等施策の進捗状況をまとめた『婦人の現状と施策』と、民間が刊行している『婦人白書』を読み比べる、というものだった。今から考えると、1年次には難解な、いきなりの大テーマである（他のプロゼミも似たり寄ったりで、教員の“趣味”に走ったものだった）。15名ほどだったろうか、社会人学生（看護師などぼくを含めて4名いた）を含む1年次生を中心に上級生や聴講生、他大からの編入生なども履修者として参加する初回の授業で、井上さんは、自分は東大新聞研究所の出身であると自己紹介した。

ぼくの自己紹介の番が回って来たときに、東大新研といえば、と前置きをして、「予想される組織に寄せて」という論文を書き、東大闘争に加わったものの病のため夭折し、のちに山本義隆『知性の叛乱』と同じ出版社（前衛社）から出た遺稿集『わが愛と叛逆』で知られる所美都子がいたところであり、そのご縁のある先生の許で「女性問題」を学べるのは光栄だといったようなことを言った。井上さんは、驚いた顔をしてぼくを見た。所美都子は東大で井上さんとシモーン・ヴェイユ研究会をやっていた。『わが愛と叛逆』の香内三郎の緒言に、井上さんの名が出てくる。

生意気な1年生だったが、もとより同級生は既に社会人であり、こちらも23歳になろうとしていたのだから、まあいいだろう。それに、上級生（同じ年の男だったが）のYは、高校時代にベーベルの『婦人論』を先生に読まされて感激したのでこのプロゼミを取ってみようと思ったと自己紹介するなど、大なり小なりぼくらはみんな「生意気ざかり」だったのだ。

3——あるいは酒でいっばいのゼミ

ご多分にもれず、上級生の提案で夏休みのプロゼミの合宿が持たれた。学生が幹事となり箱根・強羅の本格的な硫黄泉が掛け流しの国民宿舎を取って2泊3日実施されたのだが、井上さんは翌日、『思想の科学』誌において、井上さんが言うところの「マルクスがスカートを穿いたような」水田珠枝との対談が入ったため、初日のみで日帰りしなければならぬとのことだった。

9月最後の週でもあったので夏休み中の近況報告がゼミ員からなされ、聴講生の1人が「このところ、自分の、怒りの欠如が気になる」と言っていたことを憶い出す。「怒り」は我われ共通の感情であり合いことばだった。大学当局に対して、権威に対して、政府に対して、差別に対して、社会に対して。

1杯飲りながら夕食を食べてから井上さんが箱根登山鉄道で帰ることになり強羅駅まで

ぼくたちは見送りに行き、電車が動き出してから、車内の井上さんに向けてみんなでバンザイをした。結構乗客がいた。「恥ずかしいだろうな」「穴があったら入りたいよね」と言いながら、我われは宿舎への坂道を戻った。みんな、いたずらっ子だった。

帰ってからは呑みながら夜中まで議論をし、そのうち生き方や人や社会とのかかわりをめぐって口論が始まった。2泊目も自主ゼミをやり、2階の部屋での夜のコンパでまた口論が始まり、その声は一足先に部屋に戻っていた階下のぼくの寢床にまで聞こえてきた。宿のお爺さんが「もう夜中ですので」とおそろおそろ言っていたが、きつく注意することができないほどの、よっぽどの剣幕だったのだろう。ぼくらはみんなやり場のない怒りを持ち、苛立ち、議論好きで、喧嘩っ早くて、酒好きだった。

その時の井上さんの対談は、『思想の科学』79年10月号の、「女たちの現在と未来」を特集するメイン記事として「七〇年代女性解放運動と八〇年代の展望」として載り、そこで井上さんは「私なんか、最近色んなところで腹が立って怒ってます」というようなことを言っていて、水田珠枝も同意していた。その頃はまだそういう「怒れる若者」の時代だったのだ。

4——人文学部質の教授

書き出せばきりが無いのだが、最後に研究室にかかわることをあと2つだけ。

井上さんをはじめ多くの教員は自分の研究室を学生に開放していた。カギもかけず、あるいは学生が勝手に合いカギをつくって、サークル室代わりに自由に出入りし、自由に研究室の本を借り出し、そこで学食のカレーやラーメンを持ち込んで食べたり、酒盛りをしたりしていた。ぼくも、登校するとまず井上研に行き、休み時間も常駐し、その“主”のような顔をしていた。そして、どの研究室にも“主”がいた。

もう20年以上前にある雑誌のエッセイで書いたことだが、2年次生になって4月の新学期、例のごとく井上さん不在の研究室でデスクの前に我がもの顔で座っていたところ、経済学部の学生とおぼしき学生が履修希望カードを手持って、ぼくにおずおずと、「井上先生ですか、遅くなりましたが履修したいのでカードを受け取ってください」と差し出す。非常勤講師の構成員まで覚えていたぼくは、その「井上先生」とは非常勤で一般教育の先生、ここの井上先生は専任教員でしかも女性、と説明した。

そのことをゼミ仲間に言うと、そりゃ、それだけで不可だな、とみんなで笑い、教員に間違えられたぼくのオッサンぶりをからかった。そして、「井上輝子」をどうやってオトコの名と思ったのだ？ 「てるし」とでも読んだか？ といったことで話題になった。

大学教員になった今、多くの学生は、共通教養科目や専門科目、非常勤講師と専任教員の区別がついていないことを実感している。このことに関しては、どうやら昔も今も変わっていないようである。

5 ―― 和光大含め全部沈没

ぼくが3年次生になった81年度、井上さんは、鶴見俊輔、大江健三郎、山口昌男らも教えたメキシコ国立大学院大学（エル・コレヒオ・デ・メヒコ）に客員教授として招聘されて不在だった。“主”であるぼくは、「革命的井上主義者同盟」を名乗って研究室のドアに「革井同」の略称で看板を掲げた。サー連（サークル連合）の委員長Sがそれを見て「ん？ 革共同!？」と気色ばんだことがあったので、早晩取り外した。学生運動の名残はまだあり、全共闘運動に「遅れてきた青年」であるぼくも、10・21国際反戦デーのデモにゼミの連中と毎年のように出かけたりしていた。

井上輝子さんはそういった、70年代から80年代前半にいたる、まだ「議論する大学」「怒れる学生たちのいる大学」「解放された大学」の時代、それを全面に押し出す和光大学で、研究と教育に携わっていた。井上さんの許で、こういった魅力と魔力のある“和光の疾風怒濤時代後半”の4年間を、また女性学関係の学会の立ち上がり期を、そしてその後5～6年間にわたる「女性雑誌研究会」時代を、ともに過ごせ、またその「役得」にあずかれたことを、ぼくはとても幸運に思っている。

井上さんはおだやかなパーソナリティーの人だ。それでも批判的で、抵抗し、怒っていたし、和光大学もそうだった。だが、どうしようもないこの国の方がいささかしたたかなようで、残念ながら絶望とともにぼくも、ぼくの愛した和光大も、そして井上さんの怒りも、しぼみがちだ。井上ふたたび、和光ふたたび。

―― [もろはし たいき・フェリス女学院大学文学部教授]